

文献

抄録

可能な限りでの生活；慢性に息切れをもつ患者に対する Exercise

息切れは、慢性閉塞性肺疾患患者を最も無活動、無力にする症状であり、運動遂行能力をより低下させる要因となる。よって、慢性に息切れをもつ患者の rehabilitation の目的は、日常生活の中での不快感をより減じるかまたは、身体活動の範囲を拡げることにある。

本論は、慢性に息切れをもつ肺疾患患者に対する理学療法（気道のクリーニング、呼吸調整等）の内、特に耐久性訓練について述べられたものであり、評価・効果・実際のプログラム・気管支拡張剤と運動・改善のメカニズム・プログラムを行う上での要点といった項目の見出しがついている。

まず著者は、評価で TMD (the—12 minute distance の略) を紹介し、重最大努力耐久性をみるのに、有効で簡便な方法であると述べている。これは、12 分間で囲いのされた平坦な通路を、被験者がどれくらいの距離歩行出来るか調べる試験で、途中で休みをとってもよいが、試験終了時には、これ以上少しも歩けないと感じるほど努力させるのが条件である。

プログラムは、階段と平地歩行を負荷として用い、週

毎に漸増的に負荷量を増す方法で、負荷量が図表にまとめられている。この表の適応禁忌は、虚血性疾患・間欠性跛行症・筋骨格系病変・悪性肺腫瘍となっている。

最後に、プログラムを行う上での要点として、以下の事項があげられている。1. 日常必要とする活動に関連した規則的な練習内容（階段、歩行）。2. より有機的代謝を高めるのに十分な身体活動強度をもつこと。3. 息切れは害でないという確信と消極的になるなといった忠告。4. 到達するゴールの提示。

ゴールは、買物へ行くといったような日常生活に結びついた形で、患者のモチベーションを高める。そして得られた能力の維持は、このゴールの活動を、週に 2, 3 度遂行することにより行われ、ゴール達成後のプログラムとして指示される。

Webber BA : Assistant Superintendent Physiotherapist, Brompton Hospital, London, Physiotherapy 67(5) : 128-130, 1981

(国立療養所東名古屋病院附属

リハビリテーション学院 理学療法士 米澤久幸)

超音波撮影法による大腿四頭筋萎縮の測定

膝関節の損傷は大腿四頭筋萎縮につながる。筋生検により大腿筋群の萎縮は過程が均一でなく、特に大腿四頭筋に選択的に起こることが報告されている。本研究では超音波撮影法により、大腿四頭筋の断面像を明らかにする方法と膝関節損傷後の四頭筋萎縮について報告する。再現性の研究対象は、女性 4 例、男性 3 例、大腿四頭筋の萎縮については、女性 5 例、男性 16 例（平均年齢 27 歳、膝損傷患者）を被検者とした。被検者は仰臥位、膝伸展位・股 5°~10° 屈曲位で大腿中央（大転子～外側膝関節裂隙の中間）を 2.5 MHz・5 dB/cm の超音波により撮影した。同時に、大腿中央の周径および脂肪を除いた大腿体積 (Davies & Sargeant の方程式使用) を測定した。得られた断面像では、大腿骨と四頭筋の境界は鮮明、四頭筋と大腿二頭筋短頭及び内側広筋と長内転筋・縫工筋の境界は不鮮明であった。男性よりも女性、脂肪の多い被験者に境界はより鮮明であった。再現性につい

て各 4 回にわたる測定の結果、同一被験者における四頭筋断面積測定値の変動係数は 4.0% であった。大腿四頭筋萎縮について調べた結果、大腿周径の患/健比は断面積の患/健比より大であり、損傷後の大腿体積の縮小率より断面積の縮小率の方が大であった。従来、筋断面像評価は CT によって行われてきたが、本研究は超音波を利用し、放射線照射を伴わずに断面像が得られることを示唆している。PT リサーチとして個々の筋の萎縮過程を明らかにする上で、本法は有用である。

Young A, Hughes I, Russell P, Parker MJ, Nichols PJR : Measurement of Quadriceps Muscle Wasting by Ultrasonography, Rheumatology and Rehabilitation, 19(3) : 141-148, 1980

(東京都立府中リハビリテーション専門学校

理学療法士 高橋正明)

文献

抄録

身障 OT におけるクラフトの使用について

本論文は、身障部門におけるクラフトが歴史的にいか
に位置づけられてきたのかを詳しく述べ、現在クラフト
がどんな役割りを果たしているのかについての調査を行
い、将来的な展望を試みたものである。

まず1900年より現在までを10年もしくは20年単位
に区切り、それぞれの年代におけるクラフトの位置づ
けを考察し、クラフトがいかに作業療法の専門性の確立
に大きく貢献してきたかを述べている。

クラフト使用状況についての調査は、まず California
内で予備調査を行い、これをもとに AOTA 会員の中
から無作為に250人を抽出して行った。有効数は141
(56%)あり、これを分析した結果を述べている。

調査の結果、72%の OT はクラフトを治療手段とし
て用いたが、28%は使用していなかった。使用している
理由はクラフトにより巧緻性一筋力一耐久性の改善に役
立つというのが主な理由で、使用しないのは、正確に記
録しうる治療手段でない、クラフト使用の正当性の主張

が困難であるなどが理由であった。また COTAs を雇用
している施設ではクラフトを使用している率が高かつ
た。このことは COTAs の人達にクラフト指導を任せて
しまっていることを示している。OT はもっとクラフト
の持つ治療の意味を吟味して、OT の指導のもとに行う
ことを考える必要があるのではなからうかとの疑問をあ
げている。

論文の結論では、作業療法の専門性は時代により変遷
することは認めながらも今日なおクラフトの必要性を主
張している。そしてクラフトが記録や治療手段として問
題があるとすれば、歴史的文献を見直しその中に解決策
を見出しクラフト使用に関する教育方法の修正をも考え
なければならないと述べている。

Julie CB, Zoe M : The Use of Crafts in Occupa-
tional Therapy for the Physically Disabled, AJOT 35 :
369-374, 1981

(川崎リハビリテーション学院作業療法士 佐藤 真一)

脊髄損傷者の社会復帰と職業リハビリテーション

英国では、精神障害者や身体障害者の雇用サービスを行
っている Disablement Resettlement Officer (以下
D.R.Os. と略す) という職種がある。Robert Jones
and Agnes Hunt Orthopedic Hospital の Midland
Spinal Injuries Unit での脊髄損傷者への社会復帰のため
の評価やその活動を報告している。

このユニットには、Consultant Physician, Registrar,
Ward Sister, Co-ordinator, PT, OT, SW, D.R. Os. ら
がおり、週1回のカンファレンスを行い、それぞれに処
方がだされ、訓練を行っている。

身体状態・家庭環境・資格・可能性・性格やモチベーシ
ョン・目的と抱負などをインタビューし、次のように
アプローチしている。a) 職業リハビリテーション、
b) 職業訓練、c) 家屋改造、d) 雇用のための特別な
設備、e) 援助金、f) 移動手段、g) 自営など、し
かし一般社会への就労は難しく、原因として、1) 保障
2) モチベーション、3) 一般工場での雇用ができない
事、4) 補償、5) 家屋改造の必要性などの問題が考え

られる。

脊髄損傷者の就労状況を表わしたものがないが最近、脊
損協会で調査した結果、総数400人のうち対麻痺の50%
四肢麻痺の40%が就労していた。また、当ユニットで
は対麻痺60%が退院前に就職し、後の20%が職業リハ
ビリテーションや職業訓練センターへ行った後就職して
いる。四肢麻痺の18%は就職しているが、後の18%が
リハビリテーションや教育コースに落ちついている。

現在のリハビリテーションは完全ではなく患者の治療
は社会へもどり独立するまで続ける必要があり、患者に
対するサービスだけでなく、一般の人を教育する必要が
ある、と述べている。

Clarke S : Spinal Cord Injuries Resettlement and
Rehabilitation-into Employment, BJOT 44(1) : 14-
16, 1981

(九州リハビリテーション大学校
作業療法士 柳 要子)